第５章　ソロモンとイスラエル後期のリーダーたちの祈り④

エリシャ

死者に命を取り戻す

霊的な理解を求める

死者に命を取り戻す

エリシャもまた、師匠のエリヤのように素晴らしい祈りの人でした。彼はエリヤの霊から「二つの分け前」、すなわち後継者の取り分を受け取りました。その結果、彼は預言者たちのリーダーとして、エリヤの地位を継承したものと認識されました(Ⅱ列王2:9、15)。また、エリヤと同様、エリシャは、およそ息ある者がめったに得られないような祈りの答えを体験することにもなりました。

> エリシャが家に着くと、なんと、その子は死んで、寝台の上に横たわっていた。エリシャは中に入り、戸をしめて、ふたりだけになって、主に祈った。それから、寝台の上に上がり、その子の上に身を伏せ、自分の口を子どもの口の上に、自分の目を子どもの目の上に、自分の両手を子どもの両手の上に重ねて、子どもの上に身をかがめると、子どものからだが暖かくなってきた。それから彼は降りて、部屋の中をあちら、こちらと歩き回り、また、寝台の上に上がり、子どもの上に身をかがめると、子どもは七回くしゃみをして目を開いた。(Ⅱ列王記4:32-35)

死人をよみがえらせるということは、当時にしても、決してありふれたことではありませんでした。これまでもそうですし、これからもそうでしょう。しかし、だからといって、それが起こり得ないというわけではあ

りません。神は変化なさっておらず、その力もまた、減少してきているわけではないからです。その力によって、人々はこれまで死からよみがえらされてきましたし、これからもそういう人々はいるでしょう。「神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか」(使徒26:8)。エリヤも既に同様の奇跡のために用いられていました。エリシャもその話は師匠から聞かされていたはずです。その結果、同様の奇跡の機会が目の前に現れたとき、彼の信仰は高まったのでした。彼の働きは、先駆者の型に従うものとなりました。友人に祈りの姿を真似したいと思わせることのない人が、聞かれる祈りができることなど、めったにないでしょう。

エリシャは「その子の上に身を伏せ」(Ⅱ列王4:34) たと記されていますが、これはあたかも自らの存在に本質的な、熱や霊の一部を、その子に伝えるためであるかのようでした。このようにして、エリシャはエリヤのように(I列王17:21) 神に奇跡をお願いした後、自分の切なる願いと神の力に対する信頼が、いかに本物であるかを表現しました。この神の力に、彼はこの偉大なわざの達成をより頼んでいたのです。

彼はその後、少年の体から離れ(ヘブライ語が示しているところによれば、彼はシュネム人の家に下っていったという可能性もあるようですが) 、心配で心がいっぱいであるかのように部屋中を歩き回り、求めている奇跡だけを待ち望んでいました。そして、再び子どもの上に覆いかぶさります(Ⅱ列王4:35)。死せる魂に霊的ないのちを分かち合いたいと真摯に願う人々もまた、祈りと、それらの魂と直接に向き合うことにおいて、熱心に働かなければなりません。「自然の方法で行うならば、それは私たちの力である。超自然的なものは神に属する。私たちは、常に自らの働きを行ったうえで、神がご自身のお働きをなしてくださるよう乞い願わなければならないのである」。

霊的な理解を求める

アラムの王はエリシャを捕らえたいと考えていました。それは、王がイスラエルに対して考えていた秘密の計画を、ことごとく、神がエリシャにお教えになり、エリシャがイスラエルの王に教えることで妨げられてきていたからです。そこである夜、アラムの者たちがエリシャを捕らえようと町を取り囲みました。エリシャのしもべは恐れましたが、エリシャは恐れるなと言い、しもべのために祈りました。

> 「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。アラムがエリシャに向かって下って来たとき、彼は主に祈って言った。「どうぞ、この民を打って、盲目にしてください。」 そこで主はエリシャのことばのとおり、彼らを打って、盲目にされた。(Ⅱ列王記6:17-18)

熟練した神のしもべと初心者では、違ったものを見ています。だからこそ、先を行く者は後に続く者の重荷を負う必要があります。エリシャは、しもべの体験した絶望と落胆を、全く感じていませんでした。彼はその霊的な感覚によって、天の軍勢の臨在を見きわめていたのです。しもべにも同じ幻が必要でした。そして、そのためにエリシャは祈り、驚くべき結果をいただいたのでした。

しかし、エリシャはさらに、間髪を入れず祈りました。「どうぞ、この民を打って、盲目にしてください」。なんという皮肉でしょうか。しもべのためには見えるようにと祈り、敵については盲目になるようにと祈っているのです。神はご自分の忠実な預言者のために、両方の祈りにお答えになりました。

> これらの祈りに対する答えは、表面的には気まぐれなもののように思われるかもしれない。しかし、国内の政治的状況という背景に照らし合わせて見るならば、それらは強力な解放のわざだったのである。エリシャがシリヤ人をサマリヤに連れて行ったのは、彼らを殺すためではなかった。…エリシャはイスラエルの王に、彼らを解放し手厚くもてなすよう助言をしたが、これが結局のところ、「アラムの略奪隊は、二度とイスラエルの地に侵入して来なかった」(II列王6:23)という事態をもたらし、国を救うところとなったのである。

ダビデもまた、神の深い事柄を理解できるようにと祈っています。「私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください」(詩119:18)。人間の目をくらませ、現実を見えなくさせるのに最も長けているのは、サタンです(IIコリント4:4、エペソ4:18を参照)。

> そのばあい、この世の神(サタン)が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。(2コリント4:4)

神のしもべたちが物事をはっきりと、そして真に見ることができるということは、何にも優って重要です。祈りこそ、神がこの目的のために定めてくださった方法なのです。

質問

1　エリシャは先駆者であるエリヤの祈りから影響を受けていました。それはどんな影響だったと想像できますか？
（あなたには祈りのモデル（型）となっている人がいますか？　あなたは誰かの祈りのモデルになっていると思いますか？

2　エリシャは神の力に期待をしていました。私たちも神の力に期待します。同時に、自分がすべきことを悟って、それに取り組むことも必要です。あなたは自分の課題や問題について、何を神がしてくださるか、何を自分自身がすべきかわかっていると思いますか？

3　同じ状況にいながら、エリシャとそのしもべが見ているものは大きく違っていました。
その理由は何だと思いますか？

4　私たちがエリシャのように物事をはっきりと、そして真に見ることができるためにはどうしたらよいと思いますか？
あなたは、祈ることによって物事や状況について正しく適切な見方ができるようになった経験がありますか？

5　今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？

祈り

神さま、私を、まわりの人たちの模範となる熟練した祈り手としてください。私の心の目を開いて、どんな状況の中でもあなたの真実を見て、悟ることができますように。